

1. 蜂蜜ポップコーンはラム酒に合うか？

先日、植木さんから、Rio Grande の歌詞について質問を受けました。36小節からの「Oh, we'll sell us some popcorn molasses and rum」の「us」はどういう意味か、要らないのではないかと。確かにそうですね。直訳すると「私たちが私たちに蜂蜜ポップコーンとラム酒を売る」となってしまう。「長屋の花見」じゃあるまいし。

そこで手持ちの Shanty 本を見てみたところ、Gray Coover “THE POCKET SHANTYMAN”, William Main Doerflinger “Songs of the Sailor and Lumberman”, Stan Hugill “Shanties from Seven Seas”には歌詞がありました。しかし、前2者にはこのくだりはなく、Hugill のには似た歌詞がありました。

シーシャンティはもともと口伝えで広まった歌ですからヴァリエーションがいっぱいあります。Hugill のにも6通りの歌詞がありました。その4番目は1番から10番まであり、6番にこんな歌詞が出てきます。

We'll sell our salt cod for molasses an' rum,
An' get back again 'fore Thanksgivin' has come.

直訳すると、「俺たちは糖蜜とラム酒に合う鱈の塩漬けを売るよ」あたりでしょうか。確かに鱈の塩漬けはラム酒に合いそうです。もちろん、ウキスキーにも日本酒にもビールにも、アルコールなら何にでも合いそうです。しかし糖蜜（サトウキビ蜜）は何に合うのでしょうか。

と考えたのは、赤坂見附、ではなく浅はかでした。そもそも、ラム酒はサトウキビを原料としているのです。

オンラインお酒販売サイトの Traditional molasses rum ページには、糖蜜ラム酒の蘊蓄が語られています。

とすると「鱈の塩漬けでトウモロコシ蜜のラム酒をやるうぜ」でいいかなと。わざわざ原材料を言う必要はないけど、「山田錦を削ぎ落とした日本酒」とか「有機栽培オオムギで創ったビール」という言い方もあるので、まあいいか。

しかし、「私たちの Rio Grande」にはポップコーンが出てきます。これは、小林正明さん（新人への注：設立から大町さん時代前期までの副指揮者かつ事務局長）の採譜で、小林さんがどの出典からこの歌詞を切り取ったか、いまは確認する術はありません。そこで想像を膨らませてみます。

まず、糖蜜とポップコーンは相性が良いようです。料理レシピのサイトを見ると、「ポップコーンのコーティングに糖蜜を使うと、白砂糖では得られない、より深く豊かな風味を与えます。」とあります。確かに美味しくそうですね。ちょっとしたおやつにぴったりです。



しかし、ラム酒のつまみとしてアリなのでしょう。おつまみには辛いものが多いですが、チョコレートをつまみにウキスキーを飲む人は少なくありません。こんなページもありましたので、一件落着かな。



いえいえ、まだ謎は残っています。we'll sell us の「us」です。これについては、英語の詳しい方に確認する必要がありますが、「ただの強調形でよいのでは」と考えています。

2. ブンガワン・ソロの誕生秘話

プログラム version 0 で、曲の解説案を書きましたが、この曲がいつ出来たかについては書いてませんでした。

小永井さんから朝日新聞記事（2010.3.13）のコピーをいただきました。その要点を以下に記します。

内藤尚志記者はこの歌の来歴を知りたくて、グサン・マルトハルトノさん（当時92歳）に会いに行った。グサンさんは1917年にソロで生まれ、17歳の時、バタビア（ジャカルタ）から入ってきた音楽「クロンチョン」に出会う。クロンチョンはポルトガルからの移民が16世紀ごろに生んだポピュラー音楽。小さなギターで刻む細かいリズムと伸びやかな旋律。グサンさんはすぐ虜になり友人たちとバンドを組んで路上で演奏した。自ら売り込んでラジオでも歌った。21歳で作曲も始める。1940年、23歳で書いた3番目の曲がブンガワン・ソロ。ソロ川のほとりを散歩していて「突然、閃いた」。小学校を出ただけで音楽の専門教育は受けていないから、楽譜は読めない。竹笛で音を探し、数字で音階を書き残した。完成まで3か月かかった。

クロンチョンとしては異色の曲だった。＜中略＞根っからのクロンチョンファンは反発した。だが、ソロの若者には受け、街中で歌われ出す。

そこにやってきたのが「大東亜共栄圏」を掲げる日本軍だった。オランダに代わって1942年から支配が始まると、「敵国」欧米の音楽は禁止され、日本の歌とともにクロンチョンが推奨される。日本語の「啓民文化指導所」の依頼で、グサンさんもジャワ島各地で歌った。＜中略＞日本軍が「啓発」のために活用したラジオでも、盛んに流れた。その旋律は、言葉のわからない日本兵たちをも癒した。

＜後略＞

以上文責：B2 山路永司。